

服部南郭の韜晦

— 護園垂流の性格形成の一契機 —

一

丸山真男氏は、かつて、「近世儒教の発展における徠学の特質並にその国学との関聯」において、荻生徠徠が儒教を政治化することによってかえって非政治的な契機をみずからのうちに導入したいきさつを、徠徠学における公私の分裂としてとらえ、こうした分裂にもかかわらず徠徠学の体系的統一が同時に人格的統一をとめないえた理由を、徠徠の「殆んど超人的な博学多識」にもとめられた。そして、その着意の必然の帰結として、徠徠学がその公的な側面と私的な側面とを、前者は太宰春台・山県周南ら、後者は服部南郭・安藤東野・平野金華

梅谷文夫

らというように、それぞれ異なる担い手によって継承されねばならなかった事情を、護園の諸生の資質や能力が、治国平天下の学から詩文・歴史・故事来歴の考証にいたる徠徠学の広大な領域を一身に兼ねるにはいずれも不足であったがために、おのおのその一面のみを追求した結果であると見られ、徠徠学の分裂はまず人格的分裂として表われ、やがてそれが垂流における理論的不統一を將來したという図式を提示せられた。⁽¹⁾

しかしながら、丸山氏が徠徠学の私的側面の継承者としてあげられた三人に限って言えば、いずれも、己れの資質や能力ないしは嗜好のみで経世済民の学としての徠徠学の公的側面を切り捨て、詩文の道を選んだのでは決

してない。さきに発表した拙稿⁽²⁾にて詳しく指摘したように、かれらはかれらの論理において、経済を、己れらの生涯をかけて究めるにはあたいしない学問として、これを否定し、詩文の風雅にみずからを馭りたてていったのである。それは徂徠学に対する護園内部からの、不十分ではあるが一応の批判であり、かつまた意識的な離脱であったのだ。しかも、かれらには、かれらの論理を裏づける一つの痛切な体験があった。享保元年(一七一六)の南郭致仕と東野辞粟とである。

周知のように、南郭も東野も、徂徠と同じく、もと柳沢吉保に仕えていた。二人は奇しくも同庚の天和三年(一六八三)生れであるが、吉保に仕えたのは南郭が早く、元禄十一年(一六九八)のことで、東野は宝永年間(一七〇四—一〇)と伝えられている。もともと東野は、もともと官仕が性に合わぬらしく、正徳元年(一七一二)には早くも致仕した。しかし、東野の才を愛する吉保はその後もかれを優待し、三年のあいだ粟を支給したとい⁽³⁾う。輸粟が絶えたのは、吉保の意向に変化があったのではなく、東野のほうから辞退したのであるらしい。それからしばらく、東野は王公・大人・貴賢の門に気ままに

遊んでいるが、困窮したのであるうか、詳しい事情は不明だが、正徳五年(一七一五)頃、徂徠の奔走があって、ふたたび柳沢家より粟米を受けることになった。当時、吉保はすでに亡く、南郭が東野に与えた書牘⁽⁴⁾や東野が徂徠に復した手簡⁽⁵⁾によって推量するに、継嗣吉里とその重臣らは東野の待遇に難色をしめし、曲折のすえ、かれに扶持することを承引したのであるようだ。見識なき有司の態度に怒った南郭が、「繆公ノ側ニ人無シ、」と、温恭な人柄に似合わぬ烈しいことばをぶちまけているのは、よほど腹にすえかねるものがあったからであろう。思うに、粟米支給をみとめたとはいえ、すでに名のある東野に授けるものとしては僅少に過ぎて、南郭の憤激を買ったのではあるまいか。

南郭の詩作が急激に増加したのはあたかもこの時期である。しかも、詩会の課題や貴賢との贈答、擬古の作を除くと、この頃の詩は、いづれも、一つの共通するモチーフ、すなわち「繆公」吉里とかれの側近によって露骨にしめされた武士社会の思考(この場合、それは情緒と言いかえることも可能であろう。)のボタンが、儒者としての南郭の信ずる正義や理想ないしはモラルを受けいれるに

は、あまりにも非論理的であることへの嘆き・怨み・憤り、はたまた諦めを、同じく周囲と調和することのできぬ孤独の苦悶をうたいつづけた屈原になぞらえつつ、表現していることに、ただちに気づくはずである。

吉里が封を襲ったのは宝永六年（一七〇九）六月のことであるが、吉保の意向は、退隱後も、強く藩政に反映していたのであろう。南郭らの動きも平静で、取り立てて言うべきことは何もなかった。それが、正徳四年（一七二四）十一月二日吉保死去ののちは、吉保追慕の詩にまじって、南郭の満されぬ念いを抒べる詩が、次第に、その数を増すのである。たとえば、

林園 塵シテ野ト為ル
高台 風 且タ悲ム
蔓蔓タル階下ノ草
綿綿トシテ 雙扉ヲ胃フ^{おほ}
金鋪 洩リテ開ケズ
卸砌 苔衣ヲ生ズ
昔禽 旧主ヲ慕フ
稍々疑ツテ 山陂ニ翔ル

惟ダ 君 遺言有り
人代 空シク相違フ
如何ゾ 臣子ト為リテ
坐ナガラ之ヲ觀ルニ忍ブ可キ⁽⁷⁾

これを見るに、吉里は吉保の意志を体して藩政にのぞむよりは、むしろ、これを改めるに急であつたのだらう。むろん、吉里には吉里の言い分があつたはずだ。それに、南郭じしん、その地位から見ても、藩政の機微をどれほど理解していたか、はなはだ疑問で、かれの怒りは或いは的を外しているかもしれない。しかし、吉里が家督を嗣いでから、藩中はどうやら、吉保の側近とその支持者・吉里の側近とその支持者の新旧二派に分れ、藩の主導権をめぐる暗々裡に抗争していたようである。吉保の死後はそれがどぎつく表面に出たのであろう、南郭は、

夜ハ知ル 草沢 竜蛇ノ氣
朝ニ避ク 人間 虎豹ノ群
到ル処 従他アレ 坐席ヲ争フ
野老ヲシテ 姓名ヲ聞カシメズ⁽⁸⁾

と作って慨歎している。とすると、南郭の怒りは吉里の政策に対してよりも、かかる抗争の遠因となった吉里の器量に向けられていた、とも考えられる。後年、南郭が、経済を否定する論拠の一つとして、かりに学者に廟堂にのぼる機会が与えられたとしても、君主に人を得ない時は、礼樂をもって國政を輔佐することなど不可能で、じっさい世の藩主はおしなべて、学者を重んじ、虚心にその説に耳をかたむけ、政治の運用にそれを活かそうとはしないのだから、経済の学を究めても畢竟は無益である、という意味の発言をしきりにしているが、これかれ考え合わせれば、吉里の器量不足を南郭が怒ったと見るほうが真相に近いのではあるまいか。

かくして南郭は、吉保亡きあとの柳沢家を見かぎり、享保元年、いさぎよく官途を去った。しかも、相前後して、東野もまた、せっかく支給せられることになった米を吉里に返上している。二人がしめしあわせて柳沢家と絶縁したのではなく、まったくの偶然の一致であったことは、東野に与えた南郭の書牘に、「足下ノ廩ヲ辞スル、蓋シ同病或ハ発ス、事亦奇ナリ、」とあり、疑う余

地はない。「同病」とは官仕のむなしさに耐えられぬことを言っているのである。

南郭致仕を知った金華はさっそく詩二首を贈って、

邈タル彼ノ鳳ト鸞ト

于飛シテ 且ク梧ニ棲ム

苟モ吾ガ好ム所ニ従ハバ

冠冕ハ吾徒ニ非ズ

と、南郭の心事に共感し、かつ慰励している。金華は、

この時、守山藩に仕えて文雅を愛する藩主の下で暢び暢びと詩酒に沈湎していたのであるが、しかし官途はあくまで俗であり、時に箕山の志を思わないものでもなかった。ただ、金華は、三歳で親を失い、舅に養われたが、養育の責をのがれたい周囲の打算が、かれに自活の道を与えようと、医をまなぶことを奨めるので、十五歳、江戸に出て千田大円堂の内弟子になる、というような不幸な境遇を経過しており、そのせいも、ことさら、生計のためにやむなく己れを枉げるといふ、仕途にあるものならばしばとる態度には反撥したくなるのであろう、南郭

の強い影響を受け、かれに引きずられながらも、微妙なところでその発言は喰いちがいを見せている。しかし、それにしても、南郭致仕と東野辞廩とはかれら三人の詩想に共通のモチーフをもたらししたことは否めない。そして、そのモチーフが、産なく仕官の機会にも恵まれぬ護園の諸生を強く惹きつけたのである⁽¹³⁾。

- (1) 『日本政治思想史研究』(昭和二十七年)百四十三頁。
- (2) From Sorai to Nankaku—The Development of the “Banjin” Consciousness—(Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences. Vol. 4, No. 1 March 1964) および「南郭以後——所謂文人墨客について——」(『一橋大学研究年報 人文科学研究6』昭和三十九年三月)。
- (3) 秋元淡園「東野遺稿序」(『東野遺稿』巻上、寛延二年板)に「正徳元年辞俸家居然猶致粟三歳」とある。なお、拙稿『金華稿刪』考証」(『一橋大学研究年報 社会学研究7』昭和四十年三月)で、吉保が東野に輸粟したことの実否を疑っているかのごとき表現をしているが(二百三十一頁)、適当ではなかった。ここに訂正する。
- (4) 「与滕東壁」(『南郭先生文集』初編巻九、一ウ、享保十二年板)に「近藩中有司議致廩、盖来夫子有請云、亦惟不佞末列、力無尺寸、唯是藩中先_レ時不_レ足下用、今且俾_レ足下僕僕爾_レ嘔々_レ拜_レ五斗」とある。
- (5) 「祖徠」第三(『東野遺稿』巻下、二十一ウ)に「審_レ

聽_レ府公_レ辱_レ先生特體不_レ佞。実托_レ唇舌」とある。

- (6) 『新寛政重修諸家譜』巻三(昭和三十九年)、二百五十六頁。

(7) 「詠懐十五首」第六(『南郭先生文集』初編巻一、九ウ)なお、この連作は、当時の南郭の心境を知る上で、きわめて貴重なものである。

- (8) 「即事二首^{藤池}」第一(『南郭先生文集』初編巻四、九ウ)。

(9) たとえば「送稻子善序」(『南郭先生文集』初編巻六、十一ウ)に「士結髮稱_レ君子儒、非_レ必得_レ其君、不_レ能_レ進稱_レ詩書、退講_レ礼樂、以_レ輔_レ治、而尊_レ賢而貴_レ士之君、固未_レ常有_レ矣、士之易_レ衣并_レ食老_レ死於環堵中者、湮没而不_レ稱、遂令_レ人謂_レ學問之道、困_レ於寡耦一也」とあり、あるいは「西台滕公寿序」(同上二編巻六、二十オウ)に「今 国家依_レ封建之制、上下分定、則何以哉、即有_レ誦_レ書懷_レ独行君子之徳、如_レ季次原憲、亦以_レ經術_レ縁_レ飾_レ一吏事、猶且_レ不_レ得、則隱居放言死而已」とある。詳しくは前掲の拙稿を参照されたい。

- (10) 「与東壁」(『南郭先生文集』初編巻九、四オ)。
- (11) 「贈服子遷二首」第一(『金華先生文集刪』巻一、四オ、享保十六年板)。
- (12) 拙稿『金華稿刪』考証」(前出)を参照されたい。
- (13) 拙稿「南郭以後——所謂文人墨客について——」(前出)を参照されたい。

二

言うまでもないが、護園における学問とは、先王の道を六経にもとめて国天下を治る術を明かにし、もって為政者を輔佐して現実の政治を正すべきものである。だから、かれらの学問がその意義を十全に發揮するためには、上に、学者を重んじ、学問を尊ぶ為政者が居ること、あるいは、為政者が己れをむなしくして学者の説くところを政治に移す心構えを持っていることを前提とする⁽¹⁾。その点、綱吉や吉保は、儒学をことのほか尊崇して、学識あるものは、卑賤のものであっても、ずいぶんと登用したし、学問・教育を重んずる氣風を一般に弘めもした。そうかれらは考⁽²⁾える。のみならず、南郭はもっと深い私的な恩義を吉保から受けていた。すなわち、

昭王 駿馬ヲ好ム
飛兔 遠方ヨリ来ル
一鳴 千金に直ル
御ヲ待チテ妙オヲ呈ス
衣スルニ錦ト繡トヲ以テシ

鉤膺 玫瑰ヲ飾レリ
顧眄 朝日に曜ク
長風 高台ニ発ス
一身 恩遇ニ感ジ
心ヲ簡メテ相猜ハズ
年世 乍チ改メ移ル
芻秣 驚駘ニ齎シフス
佚態 泛駕ヲ疑ハレ
棄捐セラレテ曠野ニ回ル
還リ視テ北風ニ向フ
蕭蕭トシテ且タ悲哀ス⁽³⁾

遠方より来た飛兔が、京都に生れ、十四歳で江戸に下った南郭じしんを指していることは、一読して明かである。しかも、たとえば「衣スルニ錦ト繡トヲ以テシ 鉤膺 玫瑰ヲ飾レリ」の句が決して誇張でないことは、後年、南郭が「徒ニ以レバ昔嘗テ先侯(吉保)ノ世、薄技ヲ大藩ニ奉ジ、猥リニ弄臣ノ末ニ侍スルコトヲ得、竊ニ惟レバ当時先侯ノ恩、山高海深、乃チ喬(南郭)ヲ責ルニ其不能ヲ以テセズ、以為ラク文史ノ小、小人ノ習フ

所、片長セ使ム可シト、是ヲ以テ管ニ罪戻ヲ免ルルノミナラズ、苟クモ之ニ承ケテ顧問ニ備フルコトヲ獲タリ、亦唯臣ヲ知ルハ君ニ若クハ莫シ、乃チ先侯愚ヲ憫ムノ余リ、嘗テ私ニ喬ニ命ジテ曰ク、予ハ女ヲ疵取トセズ、後ノ人(吉里)將ニ多ヲ女ニ求メントス、我レ千秋ノ後、女其レ行カンカ、如カズ女ヲシテ名ヲ成サシメンニハ、他日或ハ四方ニ適フトモ、我レ女ヲ知ラズト謂フコト無カレト、喬感泣骨ニ刻ミ、私ニ心ニ自ラ誓フ、と回想していることでも明かであろう。文中「薄技」とあるのは十六歳の南郭が絵と歌をもって仕えたことを指している。⁽⁶⁾それ故、六代將軍家宣がかれらと対立する朱子学派の新井白石を登用したことはしばらく措くとしても、吉里がかれらを遇するに吉保のごとくしないのは、予想すべきであったとはいえ、南郭にはがまんならなかった。かつて楚人和氏なるものは璞を献じて両足を切られ、宝玉に題するに石をもってし貞士に名づけるに誑をもつてする世に生れたことを痛哭した。また、孔子も子路に答えて、被褐懷玉の人があるということは国に道が行なわれていないからだと言ったことがある。吉里のもとで南郭がそうした歎きを味わわねばならなかったことは既に述べた。したがって、吉保の死後、南郭がまず詩に作るのは、君主に人を得ず、国に道なきことへの恨みである。

揺落 秋色ヲ如何トモスルコト無シ

卜居 況ンヤ洞庭の波タツニ対フ

蕭条トシテ 白壁 三献ヲ悲ミ

歲月 芳蘭 九歌ニ託ス⁽⁶⁾

では、なぜ南郭は吉里の容れるところとならなかったであろうか。屈原がそうであったように、規矩を目の前にしながらそれを使わずにあえて歪んだ円や方形を描き、繩墨のまっすぐな線に背いて故意に曲った線にしたがうような、権力におもねる世俗のさかしらを、己れが持ちあわせていなかったがためである、とかれは考える。おもねりを当然とする時俗の中では、そうした己れの態度は、かえって世俗のいう傲であり、また狂でもあらう。

吏情 宦拙フシテ 因テ傲ト称シ

髪ヲ被リ 行クニク歌ツテ楚狂ニ似タリ⁽⁷⁾

だが、それがはたして己れの罪であろうか、南郭には時俗に同じねばならぬ理由がどうしても思いあたらな
い。それどころか、そうした生き方をしたあとの良心の
苦痛にかれは耐えられそうもなかった。

即チ流俗ニ同ジカラ使メバ

吾ガ生モ亦自ラ睨ケン

もしも、それが官仕の宿命だというのであれば、南郭は、あくまでも傲として狂として己れをつらぬくほかはない。かくて、南郭は、享保四年(一七一九)安積澹泊がかれを水戸藩に推挙しようとしたときも、「若シ夫レ喬ガ区區ハ、願クハ初志ヲ以テ終ラン、⁽⁹⁾」と称して、ふたたび仕途に就く意志のないことを明言するのである。

傲といい、狂といい、要するにそれは、官途が俗物によつて占められていることに対する南郭の反撥であったのだ。かれが藩を去つたのち東野に与えた書牘⁽¹⁰⁾には、「我輩ヨリ之ヲ視レバ、即チ禄利モ、亦唯ダ陸沈⁽¹¹⁾、世ヲ玩スルニ近シ、玩スレバ斯レ傲シ、傲スレバ斯レ慍⁽¹²⁾マ

ル、奈何ゾ野心馴ル可カラザルノ性ヲ以テ、能ク自ラ欺イテ以テ側目ノ間に持久センヤ、⁽¹¹⁾」とあり、かれが当然疎外されるべき人間であったことを、みずから認めている。東野の「知ル 爾狂態多クシテ。金門 正ニ陸沈セ⁽¹¹⁾」も、そうした南郭の姿勢を言ったのであろう。

さて、南郭が吉里にうとまれたのは、右のごとき、かれの性格のみに由来したのではない。既に触れたが、かれは、吉保の遺志が吉里によつて正しく継がれることを期待していた。しかし、吉里は、南郭の期待をうらぎつて、独自の政治を進めていく。しかも、要路にあるものは、かれにおもねつて、これを諫め正そうとはしない。そこで南郭は藩政につき批判し進言することがあったのである。だが、その結果は、南郭の立場をいよいよ悪くしただけであった。すなわち、

才高フシテ 却ツテ性情ヲシテ疎ナラシム

行吟 憔悴ス 三閭ガ賦⁽¹²⁾

かれはまた、ここでも、屈原に己れを比そうとする。世俗にさからつて正義をつらぬこうとしたと自負するか

らであらう。しかし、その正義も、のちにかれじしん、「篤力限り有り、万分モ国士モテ之ニ報ユルコト能はず」⁽¹³⁾と言ふように、苦もなく踏みにじられ、潰えさつたのである。ただ、屈原は、追放されてからも、「皇天は私阿なし、民徳を覽て焉に輔を錯く」と言い、天が正義に味方することをあくまでも信じているが、南郭は、あつさりとは、もはや礼樂は廃壞し、先王の道を回復せしめるのぞみのない時代に己れは在ると考え、「吾ガ徒ノ学ヲ為ス、固ヨリ己ニ世ニ贅疣タリ」と称して、時勢に抵抗することを諦めてしまふ。体制から疎外されながら、南郭は、自己を追いつめられ弾きだされたものとして意識しようとせず、むしろ、みずからこれに見切りをつけて去つたのだという姿勢をとらうとする。その意識が、己れを疎外した体制を、抜きがたい厚い壁として、戦わねばならぬ敵として、これと真正面から対決することを避けさせてしまつたのだ。⁽¹⁶⁾

(1) たとえば『太平策』(『日本經濟大典』巻九、百九十八—九十九頁)に「凡聖人ノ道ハ文字ニ書載セタリ、文字ハ異國ノ詞ニテ、聖人ハ又上代ノ人也、シカモ其智広大ナル事ハ天地ノ窮リナキガ如ク、凡人ノ及ブベキニ非ズ、斯ル故ニ學問ノ道ハ、俗語、詩文章ヨリ學ビ入リテ、異國ノ人ノ詞

ヲ知り、歴史ヲ學ビテ代々ノ制度、風俗ノ違ヲ知り、上代ノ書ヲ學ビテ古今詞ニ違アル事ヲ知り、六經ニ心ヲヒソメテ聖人ノ教ニ熟スレバ、其詞其ワザニ習染ム間ニ、イツトナク吾心アワヒニモ移リ行キ、智恵ノ働キモ自ラニ聖人ノ道ニ違ハズナリテ、其後今ノ世ノアリサマヲ見レバ、天下國家ヲ治ル道モ掌ヲ指スガ如クニ成コト也、シカレ共是ハ儒者ノ學問ニテ、一生ノ精力ヲ用ヒザレバ輒クハ成難キ事也、王公大人ナド当務多キ人ノ如レ此學ブ事難カルベシ、ソレハ唯聖人ノ道ヲ會得シタル人ニ習染テ、ヒタスラニ其人ヲ頼ム心ニ成テ吾物ヅキヲ出サズ、其人ノ教ニ随ヒテ年月ヲ積バ、自然ニ智慧ノ働キ各別ニ成テ、右ノ如クニ自身ニ學ビタルト何ノカハリメモ有間敷事也」とある。

(2) たとえば、太宰春台『經濟録』(巻六、十一オ、無刊記本)に「憲廟儒學ヲ尊崇シ玉ヒ卑賤ヨリ儒學ヲ以テ仕進スル者モ多ク士大夫世祿ノ家モ書ヲ読ム事ヲ務トス武家ノ世始リテ以來五百年未ダ此時ノ如ク盛成事ハ非ズ然ドモ惜ムラクハ學ヲ進ムル政未ダ立ザルニ憲廟薨ジサセ玉ヒ文廟 章廟二代ハ國ヲ享玉フ事日淺クシテ儒學ヲ興シ玉フベクモナク文明ノ化暫ク息ミナントセシ」とある。ただし、家宣||白石||に関する春台の見解は徂徠と必ずしも一致しないし、南郭およびその支持者とはむしろ対立している。

(3) 「詠懷十五首」第六(『南郭先生文集』初編卷一、九ウ)。

(4) 「答郡山柳大夫」(『南郭先生文集』二編卷十、一ウ—二オ、元文二年板)。

- (5) 湯浅常山『文会雜記』卷一上(『日本隨筆大成』第一期卷七、五百四十一頁)。
- (6) 「和答田元漢見贈二首」第一(『南郭先生文集』初編卷四、十一オ)。
- (7) 「秋懷二首」第一(同右、七ウ)。
- (8) 「春日偶作十首」第四(『南郭先生文集』初編卷三、三オ)。
- (9) 「与安澹泊」(『南郭先生文集』初編卷十、十オ)。
- (10) 「与東壁」(前出)。
- (11) 「和子遷秋日書懷八首」第六(『東野遺稿』卷上、九ウ)。
- (12) 「歲暮和江生漫興作生時罷官二首」第一(『南郭先生文集』初編卷四、十一ウ)。
- (13) 「答郡山柳大夫」(『南郭先生文集』二編卷十、二ウ)。
- (14) 「離騷」(橋本循氏訳『楚辭』岩波文庫、五十五頁)。
- (15) 「送田大心序」(『南郭先生文集』三編卷五、三オ、延享二年板)。
- (16) 外なるものと対決することを避けた南郭は、また、己れに対しても、厳しい懷疑をいだくことがなかった。かれは、かれの苦しみのよって来る故由を、すべてかれの周囲のせいにしてしまうことが、しかも、たとえは阮籍のごとくに、己れをとりまくものごとくを拒否して、己れの内側に、ただどこまでも深く沈潜しようとするのでもない。自己への甘えがあったからである。このことは、かれの亜流が無頼放蕩にながれて、いつかみずからの文学を見失

ってしまったことと無関係ではあるまい。

三

人間関係のほとんどが醜悪なものであり、そうした醜悪なものへの要請によって政治が営まれるのであってみれば、政治に清らかなもの、善なるもの、要するにヒューマニズムを期待しても、それは無いものねだりでしかない。治国平天下と言い、経済と言い、徂徠学の究極の目標は政治にあったわけだが、世襲制度に支えられた身分の固定と、そこから生ずる私的な人間関係の強い絆によって構成された政治社会・官僚機構の中では、学者の論理的・実証的な思考よりは、義理とか面目とか、人の情緒にじかに働きかける世俗の言わば無論理の論理のほうが現実には通りやすい。南郭にしても旧主吉保の意志がみすみす踏みじられていくのを、ただ拱手して見送っていたわけではない。しかもなお、己れの論理が、人間関係の強固な壁を抜いて正義を行わせるには、あまりに無力であることを思いしらされるのが落ちであったのだ。権力への飽くなき慾望、保身のための滅私が将来する理想の喪失、そうした人間が官途を占めている以上、

正義の論理にもとづいて世に処そうとする南郭が、疎外されずにそこに居られるわけではないし、それに、かれじしん、かかる違和感には耐えられようはずもない。

かくてかれは、己れを充足せしめようとする場所を求めて、禄を捨て、世俗に背を向け、かれと思想を同じくするもののみで作る閉じた社会（のちにこれが母胎となって、詩社とよばれる文壇の権力機構を形成することになる。）の中に韜晦する。だがしかし、南郭もその同調者も、己れらが論理的だと信じている思考・発想が、かれらじしんの生活全般にわたって、つねに働き行なわれていたわけではなく、むしろ、僅かに学問・詩文の世界においてのみ喚び起されるにすぎないものであることを、ついに自覚しなかった。かれらが時に近代的自我の覚醒にあと一步と迫ったかと思えるような発言をしながら、とうとうそれを成しとげることができなかったのはその故であろう。しかも、のこされたその学問においてさえ、政治を批判し改革をもとめるのは、幕府による思想統制が次第に厳しくなっていく状況下では大いに警戒せねばならず、かれらが全く外的事情に束縛されずに論理的になりえたのは、数えあげればただ古典の世界あるのみだったのであ

る。かれらが現実的なものを俗といやしむ古典の世界を雅としたのも、その意識の底に、平たく言えば、理窟が通らない世界であるが故に現実はいりであり、論理の正しさだけが通用する古典の学こそ全き真である、という考えがあったからだ。

こうしてかれらは、心の隅に経済への志向をなお潜めつつも、強いて己れを詩文の風雅に殉ずるものに仕立てあげることによって、政治社会への断ちがたき未練を忘れ去ろうとしたのである。

(1) たとえば湯浅常山『文会雜記』卷二上（『日本隨筆大成』第一期卷七、六百十二頁）に「嚴有院殿已前ハ、国初又徳川家ノコトヲ書タルヲ、板行ニシテモ少モカマヒナシ。常憲院殿ノ世ヨリ、徳川家ノコトヲ書テ板行スルヲ、殊ノ外忌キラヒタマヒ、絶板ナド仰付ラレタリ。」とあり、また、南郭自身「経済ヲツヨク云ヘバ、朝廷ヲ玩ブ心モアリタルユヘ、予ハ決シテ経済ノコトヲ云ズ」（『文会雜記』卷一上、同右五百七十五頁）と云っているが、『御触書寛保集成』書籍并板行等之部二〇二〇に「権現様之御義は勿論、惣て御当家之御事板行書本、自今無用ニ可仕候」とあるのと合せ考えれば事情を察せられよう。

（一橋大学講師）